

他動性を有する動詞に前置詞が続く構造に関する認知的考察

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(1999年11月4日 受理)

概要

ここでは次のような2文の違いを認知文法の枠組みで考察しようとするものである。

(a) She shot him.

(b) She shot at him.

shootのように動詞は本質的に他動性を持つが、(b)のようにその後には前置詞＋名詞が続き、その名詞がその動作で直接影響を受けるような場合、前置詞の機能及びその文の構造をどう見るかということがここでの課題である。(b)の場合でも、shootの対象がhimであることは(a)の場合と同じであり、この前置詞＋名詞の塊は、一般に副詞的用法と分類されているものと明確に区別されるものである。結論としては、このような場合の前置詞は話者による認知(着目)の違いを反映したものであり、前置詞のあるなしはある程度規則的な意味の違いを生み出すことを示す。従ってそれは文法現象の1つであるということである。また、動詞としては、前置詞が入る、入らないに係わらず、上の例でhimは動詞の対象であることに変わりがなく、動詞の意味が違ふと考える必要もなく、従って自動詞、他動詞の区別をすることも必要ないことになる。

1. 基本的枠組みとしての認知文法

ここで、次章からの議論の前提となる認知文法についてその概略を述べておく必要がある。認知文法の枠組みについては次のように述べることができよう。その基本は事態をfigureとgroundに切り分ける考え方であり、

Langackerは、部分・全体に関するゲシュタルト派の考え方、及びFigureとGroundの捉え方を自分の文法観に反映し「言語の意味は全て認知ドメインに照らして得られるものだ」と考えている(ここでの認知ドメインは、いわゆるフレーム、及びLakoffのいう理想認知モデルに相当するものである。...) (p.20:河上)

このfigureとgroundに相当するものが、言語分析では次のようにprofileとbaseということになる。

このドメインの中でFigureに相当する際立ち部分をプロファイル(profile)といい、... またGroundに相当するドメインをベース(base)という。Langackerは、言語の意味構造はこの二つの相互関係に見出すことができると考えている。(p.21:河上)

そして、認知文法では、我々のここでの関心である目的語、他動性といった文法的カテゴリーについて、どのような見方が取られているかが次に示されていることに大いに関係する。

(事態に対する、かつての固定的意味役割に対して) それに対するLyonsの代案は、人間の認知と知覚の基本的原理は普遍的である(すべての言語の話者に共通する)が、それらの原理を適用してある事態をカテゴリー化する仕方(その事態の捉え方)は通常複数ありうるのであって、それに伴って、事態を構成する人や物に与えられる役割も(一義的に決まるのではなく)変動しうると考える、というものである。(p.110:中右・西村)(最初の括弧内は引用者付加)

そのような枠組みのもとで、プロトタイプ論的見方が取られている。

認知言語学の根幹をなす特徴の一つは、言語の様々な側面に関するカテゴリー化の問題について、プロトタイプ論的見方を採用したことである。これまで一般的であった古典的カテゴリー論では、カテゴリーは、客観的に抽出される意味属性に基づいた、境界のはっきりしたものであるという見方を採ってきた。これに対してプロトタイプ論は、成員に段階性を認め、またその境界は連続的かつ曖昧であると考えた。そしてこの見方の方が記述的妥当性が高く、実際の人間のものの

見方について正しい姿を捉えることができると主張する。(p.27:河上)

このような認知文法の基本的枠組みを踏まえて、認知の仕方が文法現象の出現、及びその分析、理解にどのように具体的に関係してくるかといえば、次の引用が解り易いであろう。

認知文法では、言語表現の意味は、記述対象である客観的なものや事態そのものから一義的に決まるのではなく、そのものや事態がどのように（例えば、どういう視点から、どこに着目して、何との関連で）捉えられているかという要因を慣習的に組み込んでいると考えている。したがって、真理条件的に等価な複数の文でも、それぞれと結びついている捉え方が互いに異なれば、意味上対立していることになる...。(p.113:西村)

このように、事態を **base** と **profile** で捉え、例えば目的語というようなカテゴリに対して、**prototype** の見方を適用して文法現象を分析しようとするものである。この枠組みにより、本論文で示されるように、複雑に見える言語現象を整理して見るができるようになる。

何が **base** で何を **profile** するかということが、例えば目的語の選択のレベルでも、言語表現の多様性を生み出していることを後で示すことになる。筆者がこれまで様々な文法理論に触れてくるにつれ、その中で断片的にはあるが感じてきた言語の仕組みについての最大の関心が、最近の認知言語学の分野に入るものであることがようやくわかってきた。

2. 対格目的語としての **profile** の多様性

ある事態を言語化しようとした場合、その中のどの部分をどのように言葉として出すかということが問題である。事態のすべての内容を言葉に出すことは、ほとんどの場合、あまりに要素が多すぎて不可能でもあり、また、それを聞き手も必要としない。従って、話者により、特定の部分が取り上げられ、言語化されることになる。特に、外国語として英文を作るとき、我々日本人が常に気にさせられることでもある。日英語では、“発想が違っている”ということがよく指摘され、日本語のものの捉え方をそのまま英語に直訳することではうまくいかないことが多い。これは、正に事態を言語化させる仕方が異なっているからである。

Langacker などは、次のような典型的な事態モデルを取り上げ、その中の一部の要素が言語化されるものである、ということを示している (p.112-7:河上)。

(2-1) **action chain** モデル

(2-2) **causal chain** モデル

(2-3) ステージ・モデル

いずれにせよ、母国語では、何を伝えるか、そのために何を言語化するかということが無意識の内に行われている。事態を手際よく人に伝えるということは国語教育の中でも考えられてきたことであるが、これをかなり高いレベルの意識的操作として、外国語ではそれより低い文のレベルでも行う必要がある。英語による表現に関して極端なことを言えば、ものの捉え方、着目の仕方によって、文自体が極めて **simple** になったり、動詞としては基本動詞だけでも十分間に合うことがよく知られている。ただ、そのことの **trade-off** として、ものの捉え方を柔軟にすることが我々に要求されることになる。

筆者が強く感じているのは、動詞というものが、その文で捉えようとしている内容（事態）の“特徴づけ”、“把握表明”の役割を果たしているということ。事態を見て、それを表現するのに適切な全体的捉え方を行うのが動詞である。それでは、動詞に対し、その他の要素はどのように関係付けられるのかということが次章からの問題である。

多様性

ものの捉え方ということに関連して、様態を表す1つの動詞に限っても、その文型（表現の仕方）、目的語の種類などには複数の選択肢が存在する場合がある。

(62)c. I *wiped* my hands on a towel. (p.96:巻下)

(67) *Wipe* a piece of stale bread lightly across a windowsill or the kitchen floor. (p.98:巻下)

(68) The mistress of the lighthouse *wiped* the sweat from her face several times. (p.98:巻下)

ここで、**hand**、**bread** そして **sweat** は **wipe** という動作の中で全く異なった役割を果たしているが、いずれも **wipe** の対格目的語になっている。自動車のワイパーに喩えれば、**hand** は窓ガラスであり、**bread** はワイパー・ブレードであり、**sweat** は雨粒である。

巻下はこのような例を前にして、動詞の意味を次のように考えている。

前者は'wipe'の行為を「YをZで触れる」と捉えているのであり、後者は別の視角でこれを捉えている。これまでの用例から、'wipe'が(62)cの視角 (...) からや、「ZをY面上で動かす」行為(67)や、あるいは「Yから何かを取り去る」行為として眺められるのがわかる。したがって、(67)(68)の2つの'wipe'は外見は同じでも別種の行為に言及しているといえる。なぜなら、(67)の動詞を'rub'と、(68)を'sponge'と取り替えても、それぞれの文意に実質的変動が少ないが、取替え後の両文は同種の行為に言及すると直感されなくなるからである。このことから、ある動詞が常に同種の行為に言及するのではないこと、従って、その額面的な意味だけを念頭に置いてそれと専属的に結びつく前置詞を求めようとする事の根拠が薄らぐ。現実の述部表現を眺めると、動詞の個別の意味とともにそれに具体性を加味する〔視角〕の存在が浮かび上がる。(p.98:巻下) (波線は引用者による)

筆者は波線を施した部分の考え方に異議を唱えるものである。事態はそれぞれ異なっても、それを wipe という様態で捉えようとすることは、wipe の“prototypeの拡張”で捉えようというもので、巻下のいう「行為」は様々に異なっているも、同じ wipe という様態でそれらを捉えているのである。wipe で捉えた様態の中で、要素間の関係が異なった形で述べられるわけである。

やはり、ここでも何を profile するかということが関わっている。英語では、対格目的語として profile する名詞の種類にかなり幅があることがわかる。次の例は、目的語の多様性を認識させられるさらに別の例である。

(2-4) He wiped the furniture with a damp cloth. (以下の例はランダムハウス)

(2-5) Wipe the dirt off your shoes.

(2-6) wipe a mop over the desk

これらの対格目的語は、wipe が表す動作の中でそれぞれ異なった役割を果たしていて、対格目的語の多様性が明確に示されている例ではなかろうか。(2-4)の場合、目的語は wipe する対象で、(2-5)では、wipe して移動する物質、又(2-6)では wipe を行う道具となっている。ここでも自動車のワイパーに喩えれば、順に窓ガラス、雨粒、ワイパー・ブレードということになる。これらの wipe は、動作が「前後又は左右の往復運動でものの表面を…」などと特徴づけられ、それが意味の core を形成しているといえよう。しかし、このように多様な形が来るけれども、対格目的語とその後の前置詞句が主述 (のネクサス) 関係を形成していることや、対格目的語が目的語という強い profile を与えられている点を押さえれば、文の意味を取ることに構造を理解することにも迷うことは少ない。こういった英文や英文構造の理解の仕方をしっかり身に付ける必要があると考えるものである。多様性が現れる現象の奥にあるものが何であるかを理解しようとするのが重要である。

ここで対格目的語の多様性を考察したのは、我々がこの論文で目的としている「他動性をもつ動詞の後の前置詞に続く名詞」も、多様な動詞の目的語のうちの1つと考えるべきではないかと考えるからである。

3. Shootと前置詞句

当初の疑問は、本来(本質的に)他動性を持っていると考えられる動詞(例えば shoot)が、なぜ、動詞の後に前置詞+名詞に従えるのかというものであった。しかもその中の名詞は、その動作で影響を受けるもので、動詞の直接目的語にもなり得るもので、前置詞のあるなしがどういう違いを生み出すのか、またその構造をどう理解すればよいのか、ということであった。もちろん、辞書には前置詞が付く場合と付かない場合の意味の違いが記されているが、その区別の一般論的説明などはない。具体的に shoot の例を見てみよう。

(3-1) a. She shot him.

b. She shot at him.

この2文が表そうとしている事態は全体として大体同じようなものといえよう。ところが(b)は、前置詞 at が入っており、この at にその認知的な意味が反映している。即ち、この at にも事態全体の中で特に profile が与えられ、特別に言語化されているのである。特に(a)と対比することにより、その部分の違いが明確になってくる。(a)では、動詞の後に直接目的語 him が来ており、動詞 shoot の表す動作の完了、完遂が示されるが、(b)では、him は shoot のそのような意味での直接目的語にはなっていない。動詞の表す prototype 的意

味が「発射」であり、at が存在してその発射対象の場所に **profile** が置かれることによって、「彼に当たったかどうか」という動作の完遂性は不問になってくる。すなわち、

(3-2) a. *She shot him, but it missed.

b. She shot at him, but it missed.

このとき、2つの文の **shoot** に違いがあるのだろうか。文の形態を基にした分類では、異なるとする分析を与えることも可能ではある。例えば、辞書にあるように、(a)の **shoot** は vt、(b)の **shoot** は vi というように。しかし、筆者は、この2つの **shoot** には、事態を捉える、あるいは特徴づけて表す、という機能では全く同じとみなすものである。事態を同じ **shoot** という様態で捉えているのである。世の中の出来事を有限の様態で捉えようとするものである。当然、prototype 的用法とその拡張的用法が係わってくる。at が付いた場合は、その意味をこの場合だけに限定して述べることも可能であるが、このような意味の変化を一般論として法則として述べることがぜひとも必要と考える。辞書の分類などは整理のためであり、それを否定するものではないが、英語の学習という点ではこのことに考慮、工夫の余地があると考えられる。

直前で述べたように、これからどのような動詞に、どのような条件があるときに、上記のような前置詞が入ることがあるか、という条件を見出すことである。その一般法則を身に付ければ、単に対格目的語のあるなしにより vt、vi と分類する必要はなくなるものと思われる。このことは目的語を省略した文とも関係してくる。極めて抽象的に言えば次のようになる。

ある事態に対し、それを表現する動詞を決めれば、その他の言語要素は、事態の中のどの部分に **profile** を与えるかに配慮されて選択されることになる。

上の例では、**shoot at** が使われていることから、動作を受ける部分が特に at を使って場所として **profile** されていることが特徴的である。**shoot** に対格目的語が続く場合と異なり、場所の指定が続いている。また、**shoot** という動詞は本質的に (prototype としては)「発射」を表すものであろうが、直接目的語を取れば、他動詞としてはその意味が拡張され、目的語で表される対象に当たることまでを含んでくる。言い換えれば、この **shoot** という動詞の場合には、本質的に始発動作を表わすが、次に対格目的語が続く場合には、始発動作から意味拡張され完遂性も表されるということになる。他方、at が続く場合には、その拡張が起こらず、始発動作のみを表し、完遂性は必ずしも成立しなくなる、と考えられる。ある動詞に対し、こういった対表現のどちらの使い方が頻度的に多いかということに関しては、一般的には、各動詞の英語への導入や発展の歴史で異なり、個々の動詞に委ねられると考えられる。次章で **shoot** 以外の動詞についても考察を加え、**shoot** の例から推測される、前置詞のあるなしでの違いの一般論をまとめることになる。

最後に、**shoot** という動詞と同様に、**shoot** の名詞に対しても

(3-3) a. the shooting of him

b. the shooting at him

というように、上に述べたのと同じ状況が生じていることがわかる。即ち、of の場合は、**him** が対格目的語、at の場合は **at him** の形で動詞に続くのと同じである。このことから、動詞、名詞に限らず、at という場所を指定する前置詞が特に使用(**profile**)されているかどうか、ということが意味の違いを生み出している。このことは、次章の多数の例からも、認知が絡んだ法則である、と捉えることができることを示しているといえよう。

4. Shoot 以外の動詞と前置詞＋名詞

前章で具体的な1例 **shoot** を挙げて検討を加えたわけであるが、類似の例を基に共通する特徴や、個々のものを他から区別する特徴を見出してみよう。まずは、

(4-1) a. start on a new enterprise

b. start a newspaper

(4-2) a. strike a person in anger おこって人をなぐる

b. strike at a person 人に打ってかかる (襲いかかる)

(4-3) a..A dawning man will catch at a straw.

b. Catch a running horse 放れ馬を捕まえる

(4-4) a. step on a cat's tail (うっかり猫のしっぽを踏む)

b. step a highway (本街道を歩いて横切る)

各前置詞が入っている場合、その部分が事態表現の中で *profile* を受けているので、理解するときにもその点に着目する。これらの例では、前置詞があるなしで動作の完遂という点では違いはないが、前置詞の後の名詞への動作に焦点が当てられるかどうかという違いがある。前置詞は場所指定の機能を果たして、そこに焦点が当てられている。動詞に対格目的語が続く場合には、その動作の完遂性までも含めて述べられていることがわかる。その場合、動作が、その完了までに必要な時間的な幅を持って捉えられ、それが完了したことを示すことになる。

また、上の例から、次のことが導き出される。それは、

本質的に他動性を持った他動詞の後に場所を示す前置詞が続く場合には、場所が指定(*profile*)されているということで、前置詞の後の名詞が示す対象を選び出す、という働きに焦点が置かれる。つまり、選択ということにポイントが置かれる。

1つの動詞に対して、それが表そうとする事態の細部を、このように前置詞の有無だけで、簡単に、きめ細かく述べるができる、ということは英語のメリットであるが、日本語にはない形であるため、十分に注意が喚起される必要がある。次は巻下がまとめた類似表現の例である。

(4-6) a. She *banged* the keys of the piano. (以下の例は p.25-6 : 巻下)

b. A child *banging on* the piano keyboard produces unpleasant noises.

(4-7) a. She *clutched* the child's hand as they crossed the street.

b. Yoko *clutched at* his arm so tightly that his fingers were numbed.

(4-8) a. to *correct* the parallax

b. (your brain)... would then *correct for* the differences in the size of the images in your eyes.

(4-9) a. *Pull* the scale lightly with one hand...

b. ... *pull* twice as hard *on* the spring scale.

(4-10) a. Vainly, I *searched* my heard for an answer.

b. The police *searched through* the house, but found no clues.

(4-11) a. When sound waves *strike* the eardrum, they cause it to vibrate.

b. Its sound waves reach the second objects and *strike against* it.

巻下は、これらの例に対し、次のようにコメントしている。

(これらの対表現動詞で) 差異がないと考えるとどうなるであろうか。各例の対表現の動詞表現の部分が意味的に等しいとすれば、b の 'on'、'at'、'for'、'over'、'behind'などはわざわざ付加するに及ばない語、もっと端的に言えば、「余計な」語ということになる。もし前置詞や副詞が余計でないならば、それらの語句は、その意味がもともと a の動詞に内在していたが、b の表現では外に分離したということになる。そのことは動詞自体の意味が b では減少していることを意味する。(p.27 : 巻下)

「動詞の意味が減少する」などの考え方が筆者と根本的に異なる点である。動詞の意味ということに関して、*prototype* 論的あるいは *core* 論的な捉え方をすれば、上で見たようにずっとすっきりとした認識が得られることになる。ここでも、先ほど見た特徴づけが成立していることがわかる。

前置詞がある場合とない場合で、*shoot* のように決定的な違いが生じる場合がある。それに対し、巻下は、上の例ではほとんど差がないと述べている。しかし、少なくとも動詞の後に前置詞が来る場合には、それを生み出している話者の (*profile* としての) 意識、意図があると考えられる。話者の視点、ものの見方が反映されるわけで、文脈的效果が現れると言えるかもしれない。具体的にはこの章の最初に述べた例文に対する観察結果が成立している。結論として、後に前置詞+名詞の形が来るか直接目的語が来るかは動詞の意味自体には全く関係なく、従って自他の区別もあまり意味がないと考えられる。上の例で、*searched through*、*strike against* では、それぞれ後者において「を<->の中を」、「に<->に対して」の部分が *profile* されていて、その部分が明示されていることになるが、動詞による事態の捉え方はそれぞれ *search*、*strike* という捉え方である。

巻下の言う「動詞の意味が変動する」ということを否定すれば次のようになる。*climb* という語は、他動性に関してかなり程度が低いといえるが、その *prototype* の意味としては「上に」を含んでいる。しかし、*He climbed down the Grand Canyon* などと、それが拡張された形で使うこともできる。この場合、*climb*

の意味は次の(4-11)aの意味と同じと考えることができ、その **prototype** 的意味を打ち消すように前置詞が作用していると考えられる。動詞 **climb** で全体的に様態表示が行われ、前置詞が入れば、その細部事象が詳しく記述、指定されることになる。

- (4-12) a. **climb a hill** (以下はランダムハウス)
 b. **They climbed down the mountain.**
 c. **climb up a ladder**

他動詞に名詞が続く(a)では完遂性があり、また、前置詞がはいる(b)、(c)では、そのことははっきりしない。

また、**search** や **strike** などの名詞に対して、他の名詞を上と同じ関係で述べる場合には、**of** と **through**, **of** と **against** の使い分けが対応することも興味深い。

(4-13) **The searching through**+名詞

(4-14) **The striking against**+名詞

文の理解という立場からは、このような **at** が現れる動詞のさらに詳しい特徴づけ、及び、前置詞が入る場合の効果の一般論を上のように捉えることができれば、それで十分ではないだろうか。次の例では、(b)は **touch** の原義から見れば、比喩的に使用されているといえる。これも見逃せない特徴づけといえるだろう。

- (4-15) a. **Touch something with one's hand**
 b. **In his lecture he touched on the major aspects of the controversy.**

まとめ：他動性の動詞に続く前置詞により

- ① 動詞が動作を表す場合、前置詞の意味に従って、その動作の特定の部分が指定(**profile**)される (**catch** の場合)。その結果、前置詞がない場合の完遂性はなくなり (3章 **shoot** の場合)、前置詞の意味が動作の作用の仕方を明示する。
- ② また、動詞の **prototype** 的意味の一部を **cancel** したり、またそれを明示したりもする (**climb** の場合)。
- ③ 比喩的使用の可能性も出てくる (**touch** の場合)。

前置詞が動詞と名詞との間にはいるのは、その部分に認知的 **profile** が与えられ、それが反映しているのである。従って、運動などが関係する動詞一般に対し、常にそのような形が現れる可能性があるといえよう。実際、それはこの章で見た例からも想像することができよう。そのとき、当然、前置詞の意味に応じた、上の規則的な意味の違いが生み出される。そういった意味で、前置詞がはいる現象は、ほんの一部の動詞に不規則に現れる現象というのではなく、文法現象の1つであると結論付けることができる。

5. 述部の of 属格

次のような **of** は、どのような働きをしているのだろうか。こういう場合の **of** の意味、機能については、分類は見られるけれども、ほとんど分析や考察を見たことがない。動詞は、特に後ろの2つの場合において、後の名詞に対して作用がある、即ち、他動性があると考えられる。従って、動詞の後の **of** はなくてもほぼ同じ意味が成立し、なぜ **of** が付いているのかということになる。これまでの例では、前置詞としては場所に関するものばかりであったが、その点がこの場合と異なる。

(5-1) **I have never heard of it.** (以下はランダムハウス)

(5-2) **Let's drink of the spring there.**

(5-3) **I crave we may taste of your wine.**

なぜ、動詞の後に直接目的語が来ないのだろうか。**of** が前章での前置詞と同じ役割とすれば、**of** の意味、機能は何であろうか。即ち、何が **profile** されているのだろうか。このような **of** は、大部分、歴史的には動詞の後に名詞の属格形が続いていたものが **of** 属格の形になったものと考えられる。

O E では、享受・欲求・感謝・関心などの感情を示す動詞あるいは形容詞に伴うことがあったが、P E では消滅し、すべて前置詞句あるいは対格目的語に取って代わられた。(p.483:新英語学辞典) 結論としては、やはり前章までで述べたことと同じ関係が成立しているのではなかろうか。まず、動詞の部分が名詞になれば必ず **of** が必要である。

(5-4) **the hearing [of it]**

(5-5) **the drinking [of the spring]**

(5-6) **the tasting [of your wine]**

of は動詞の部分を名詞化すれば、それと次の名詞とを結合するものと考えられる。対格目的語がそれに直接

続かないので、対格目的語が続く場合よりも、ある種の間接性が生じていると考えられる。of 自体の意味はと言えば、名詞と名詞を関係付ける of で、元々の off の意味からは離れ、多くの場合、他の前置詞に取って代わることができるなど、様々な意味を表しうるが、それ故、単に名詞どうしを関係付ける文法要素であると考えざるを得ない。この名詞と名詞を結合する of が、動詞と名詞との結合の場合にも現れていると考えるものである。その意味では、元々名詞の属格形が動詞に続いてきた場合も一貫して統一的に見ることができる。従って、動詞に対する直接目的語になることを避け、of 以下で述べる名詞で表されるものを選択するという機能を持つということができよう。それ故、動作の完遂性がなくなり、対象の選択という面が浮かび上がる。逆に of がなく、直接目的語が動詞に続く場合には、動詞の動作が目的語に対し「全体的に影響する」といったことにもなってくる。

同じく

(5-7) a. I'm sure of ...

b. I'm sure that...

の of や that も同じように見ることができるのではないかと。that は、「sure の名詞概念」+that ... という形での同格の that と考えられるのではないかと。他の前置詞が続く場合も同じに見ればよいが、それでは、of と他の前置詞との差異が何かということになるが、of 以外の場合は、前置詞の持っている意味が現れるが、of の場合は、むしろ上で述べたような「結合を示す」という文法関係を示していると考えられる。of も that も、結局、前後の概念どうしを関係付けるものと統一的に見ることができる。他の文法理論を見てみると、上記の例に対し、

(b)では補文は格を必要としないが、名詞句は必ずそれを統率するものから格を与えられねばならない。(a)の of は名詞句に格を保証するために挿入されているいわば無色の前置詞である (p.77: 稲田)

と見るものがある。名詞の格というものが他の語との関係を表すものであることから、筆者の考え方に決して矛盾するものではなからう。

従って、of や that は、次の名詞がその前の動詞、形容詞などの(名詞)概念と同格と関係していることを示すものであるといえる。この場合、対表現があるわけではない点、動詞の場合と異なっている。上で示したように、動詞に直接名詞が続く場合には、このような面倒な形にする必然性は少なく、事実多くのものが対格に変化しているが、上に挙げたような少数のものに of が使われている。

記述の属格

ここでの議論と関係していると思われる事項に記述の属格がある。

(5-8) a. a matter of considerable importance (以下は新英語学辞典)

b. a newspaper of high rank

c. The flowers are of a beautiful color.

d. Can I be of any service to you?

新英語学辞典では、c や d は、of が主語の名詞と of の次の名詞との関係を示しており、a、b における名詞と名詞との関係と同じで「記述の属格」とであると述べている。即ち、c、d のような場合でさえ、of は名詞と名詞を繋ぐ働きをしていると見ることができ、このことはこの章で述べてきた of の分析をサポートするものと考えられる。筆者にとっては、of+名詞=形容詞というだけの説明では納得できなかったものである。

6. Strike him on the head 型

次のぶんは公式として覚えるしかないものと考えていた。

(6-1) She struck him on the head.

これは、strike という動作の対象(場所)が、明らかに him、the head の両方になっている。そして、その場所の大きさについては、him > head という関係になっているから、

(6-2) She is out in the yard.

における out と in the yard を並べた表現方法と同じといえる。即ち、動詞とその後の2つの名詞の関係を見てみると、2つの名詞は資格としては共に動詞の目的語となり得るものであり、動詞が表す動作の及ぶ対象(場所)を示している。従って、後の前置詞+名詞の部分については、前章まで述べてきたことがその

ままの形で現れていると見ることができる。この文は、また、動詞の目的語は1つだけであるから、候補が2つになり、こういう表現になったものと思われる。

(6-3) *She struck his head.*

との関係でもよく話題に取り上げられてきているが、(6-1)が、目的語に人間が来るように限定された、明らかに人間中心の表現であると考えられる。人間が大きく profile された形の表現形式で、その意味ではやはり特殊な文型と言えよう。この受動態

(6-4) *He was shot in the head.*

は、人間を主語（話題）として、日本語の表現にも近く、極めて理解しやすい形である。

英語の動詞の後に来る要素としては、直接目的語であってもその多様性があり、また、や、目的語と前置詞＋名詞の入れ替わりの現象に見られるように、極めて多彩である。また、主語にしても、英語では無生物主語の（広義）使役文が多いことから、動詞以外の要素の統語的配置は日本語に比べかなり幅広いという結論を下すことができる。そして、日本人としては、それらをいちいち公式、構文として列挙して覚えるのではなく、ここで述べたような原理、原則が働いているということを理解した上で文解釈に取り組みことが大切ではなからうか。それは、できるだけ覚えることを少なくすることに貢献するからである。

参考文献

- 河上 誓作 『認知言語学の基礎』 研究社 1996
 中右 実・西村 義樹 『構文と事象構造』 研究社 1998
 卷下 吉夫 『日本語から見た英語表現』 研究社 1984
 稲田 俊明 『補文の構造』 大修館書店 1989
 河本 誠 “英文の<様態+事象切り出し>構造分析” *The Okayama Review of Language and Literature* No.1, Okayama Study Group on Language and Literature 編 1995.
 新英語学事典 研究社 1982
 『小学館ランダムハウス英和大事典』 小学館 1973
 『リーダーズ英和辞典』 研究社 1984

Cognitive Study on the structure of a transitive verb followed by a preposition

Makoto KOMOTO

*Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,
 Okayama University of Science
 Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan*

(Received November 4, 1999)

Some intrinsically transitive verbs sometimes take preposition with a noun just after them. They also take the same noun directly after them, having only a slight different predicate meaning from that of the above usage. However, according to the dictionaries, those verbs are classified as intransitive and transitive in the respective cases. We take the position that each of the above verbs has the same meaning in the both cases. We then conclude that the preposition in the former case is used as a reflection of our different point of view toward the same event. The whole argument of this paper is based on the framework of cognitive grammar, which I consider as most promising.